



# FIAT LUX

—光あれ

## 第21号 2024.4

### =CONTENTS=

- ◇創立者人見東明 歿後50年 (吉田 昌志)
- ◇本・空間 (金尾 朗)
- ◇価値共創を拓く場としての図書館 (粕谷 美砂子)
- ◇教員による図書館新収資料紹介
- ◇図書館からつながる

## 創立者人見東明 歿後50年



副学長  
図書館長  
**吉田 昌志**  
YOSHIDA Masashi

本年は昭和49 (1974) 年に享年91で逝去した創立者の東明人見圓吉先生の歿後50年にあたる。これまでしばしば「館報」の話題にしてきたが、学園の源、創立者のことは何度書いても良いと思うので、50年忌に改めて叙べさせていただく。

創立者には、詩人 (文学者) としての活躍と、大正9年に本学の母胎日本女子高等学院を開いた教育者としての歩みの両面があるが、以下に図書館コレクションの中核「近代文庫」のことを誌してみたい。

「近代文庫」の成立には「禍」と「福」ふたつの要因がはたらいていた。

「禍」とは、終戦の年昭和20年4月の米軍空襲による火災である。図書館焼燼のありさまを、人見先生は、

小山のように折り重った図書のかたまりが幾つもいぶり続けて一週間以上も焼けていた。偉大な作家の作品や深遠な学者の研究がことごとく白い灰となって文字のあとをとどめない。

「ああ、万事休す」(「昭和女子大学図書館」「日本古書通信」昭41・8)

と記し、悄然として図書館の焼跡を去ったのち、立寄った古書店で、早稲田の文学の師坪内逍遙の『小説神髓』の二冊本を購ったのを機に、蒐書の再開を決意したという。

その後、昭和30年3月の二度目の火災にも挫けずに集めた資料を活用し『近代文学研究叢書』を発刊 (昭31・1) したことによってもたらされた「福」は、この『叢書』の刊行による33年の第6回菊池寛賞の受賞であった。賞金10万円を基金として、3階建400平方メートルの「近代文庫」が竣工したのは同年11月、再度の火災からわずか3年後、創立者75歳の時である。『叢書』は当初予定の54巻を越えて全76巻が陸続として刊行され、学園創立80周年を記念し、別巻「人見東明」をその掉尾とするに至った。

本『叢書』は、各巻、明治以降、日本の近代文化に貢献した人々の著作年表、資料年表を軸に生涯と業績が縷述されているが、作成の主体は卒業生による共同研究であり、本学教員の監修を経て刊行されたものだ。

プロジェクトという言葉が流通する遙か以前から、本学はたゆみないプロジェクト研究の成果を着々と発信し続けて、社会的認知を確実にしてきたのだった。

だから皆さんは、就職率の高さやグローバルキャンパスばかりではなく、この図書館に『近代文学研究叢書』のリソースとなった、図書約8万冊、雑誌約5,100タイトル、新聞約100タイトルを蔵する「近代文庫」という貴重なコレクションのあることを、もっと誇ってよいのである。



上：第1回生遠足 (大正14年10月22日 中央が創立者)  
下：近代文学研究叢書76冊、別巻 昭和31 (1956) 年1月—平成12 (2000) 年10月

# 本・空間

学長 金尾 朗

私は、環境デザイン学科で建築計画という授業を担当させてもらっている。その中で図書館の計画の説明をしているので、いくつか図書空間の経験談を準備している。今回はそのうちの図書館空間での本との出会いについてお話する。

私は故郷にいる頃は、母が国語の教師だったこともあり、家に十分本があったからか図書館というものにはあまり興味がなかった。東京に来てから大学に入っても、特に楽しいと思ったことはなく、大学の総合図書館の大きな空間に入っている、何か集中しづらくあまり良い印象はなかった。

建築を学ぶことになり、工学部1号館なる歴史ある建物に通うことになった。当時の建築学科には1号館の屋上を改築したこぢんまりとした図書室があった。真ん中が吹き抜けて、両側に2層の書架があり、ラウンジには新着の建築雑誌がおいてあった。読みたい本に囲まれて小さな満足感があつた。

入ってすぐの右側のカウンターの下から、書庫に入る経路があつた。「入ります」と係の方に声をかけて書庫に入るのは、少なからず優越感を感じることができる瞬間でもある。狭くて薄暗く、至る所に貴重な本が並んでおり、古い図書の匂いを嗅ぎながら散策するのが楽しみであつた。

ある時、その散策の途中で卒論を見つけた。もしやと思いその書列をたぐっていき、そして見つけることができた。辰野金吾（東京大学工学部初代卒業生、東京駅や日本銀行などを設計）の卒業論文である。それは万年筆で、英語で書かれていた。肉筆の記録である。開いた時の驚きと、万年筆の筆跡、色は忘れることはできない。

その後、授業で教えるようになって、幾つかの書籍を調べていたときに、有名な建築家であるルイス・カーンが以下のような趣旨の言葉を述べていたのを見つけた。

「薄暗い書架の中で自分の探していた本を見つけ、それを持って窓際に行って光のなかで本を開く、これが、図書館の醍醐味である。…」

残念なことに、私は窓際までは行かなかった。その場で感動してしまい、タイトルや書かれた内容はまるで覚えていない。そこが私のダメなところだと改めて後悔している。

空間のデザインとは、一人ひとり、個人の経験の感動のプロセスを見つめることから始まる、とでも言えそうである。図書館の場合は、本好きの、小さいが、楽しい本当の出会いのプロセスであろう。この私の経験は差し詰め古典的な図書館空間とも言えるが、これらの集積が空間を成していくと考えると想像が膨らむ。

さらに、唯一存在するという概念に着目してみよう。貴重な本の集積という側面、本が人のメッセージの塊であることを考えると、図書館や書庫というのはこの上なく不可思議な魅力を集積した空間であると言える。それが暗闇と光の間を行き来することで形成されると考えると、語り伝えるには十分美しく、本質的な内容である…と考え自己満足しながら話すことにしている。私はそう感じてはいるのであるが、果たしてどこまで伝わっているだろうか。

これに絡んでもう一つ授業ネタがあるが、またの機会に、あるいは、授業を受講する方にお伝えできればと思う。すでに聞いたはずの方は、初めて聞いたとは言わないで欲しい。毎年話しているはずなので。



Berlin Free University (図書館)  
筆者撮影



Universitat Pompeu Fabra (図書館)  
筆者撮影

# 価値共創を拓く場としての図書館

専門職大学院 福祉共創マネジメント専攻主任 粕谷 美砂子

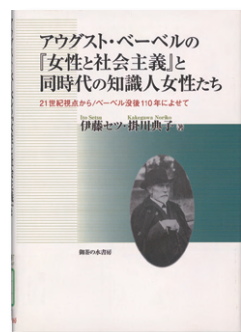
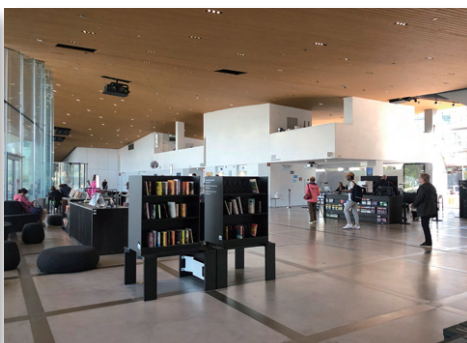
2023年4月から本学大学院に、新しく社会人を対象としたリスキリング・リカレント教育を目的とした、福祉社会・経営研究科 福祉共創マネジメント専攻が開講した。本専攻前身の生活機構研究科 福祉社会研究専攻1年制コースとしての2年間を含め、2023年10月時点での入学者は109名である。社会人大学院生は、各自が関心を持つ多彩な社会的課題をテーマに課題研究報告書または修士論文を執筆し、それを土台にそれぞれの人生の次のステップへと進み、引き続き社会で活躍している。仕事、出産、育児、介護等をしながら大学院で学ぶことは想像以上に気力と体力が必要であるが、職場では出会うことが難しい異業種の人たちや実務家教員を含む学際的な領域を専門とする教員との議論によって、新しい価値を共に拓くことは、学問の面白さと深化につながる。言うまでもなく、その手助けをしてくれる場が図書館であり、この場で多くの書籍・論文に出会う。

図書館には、多忙な社会人院生のために、開館日・開館時間の拡大、図書館ガイダンスの実施などの学びの環境を整えていただいた。そのため、海外を含めて遠方からオンライン受講をする院生たちからは、図書館のオンライン利用で先行研究を収集し、来校した際にはレファレンスカウンターで相談し、本学敷地内に隣接するテンプル大学ジャパンキャンパスの図書館も利用するなど図書館をフル活用したという声が寄せられている。

さて、学内の私の心休まる場所の一つに図書館地下の書庫がある。調べものをするために少しひんやりと感じる書庫に入り、知の宝庫である書物に囲まれながら深呼吸して静かなひとときを楽しむ。筆者は学生時代から、恩師が自主サークルとして開催してくれた「読書会」に参加し、毎月1冊本を読み、参加者と感想などを意見交換することを、現在も続けている。その面白さを学生の皆さんにも引き継ぎたいと学部ゼミでも行っている。学部卒業後数年を経て入学した筆者自身の大学院生時代には研究テーマに関わるUMI Dissertationを図書館に申請し、利用したことなどを懐かしく思い出す。中でも、女性文庫（1962年創設）は特によく閲覧する本学図書館の特徴の一つのコレクションであるし、関連して「ゲリッチェン女性史コレクション」(The Gerritsen Collection of Women's History, 1543-1945)を利用した研究を、現在筆者が所員として関わっている女性文化研究所の研究として、助手、大学院生、日本学術振興会特別研究員（PD）時代から傍らで見聞きしてきた。2023年夏にはその女性文化研究所の研究・プロジェクトの一環として、フィンランド・ヘルシンキのOodi Helsinki Central Libraryを訪問した。多くの市民がそれぞれの目的で自由に利用し、創造性を発揮できる様子を見て、生涯にわたる、まさにリスキリング・リカレント教育に図書館が果たす役割についても思いを馳せることができた。多くの大学院生・学部学生が、価値共創を拓く場として図書館を活用しながら研究を進めていくことを期待している。



Oodi Helsinki Central Library



〔女性文庫蔵書〕  
「アウグスト・ベーベルの『女性と社会主義』と同時代の知識人女性たち—21世紀視点から／ベーベル没後110年によせて」伊藤セツ・掛川典子著  
御茶の水書房 2023年8月

# 教員による図書館新収資料紹介

## 芸術品として宗教写本と魅力『アレクサンデル六世クリスマスミサ典礼書』

人間文化学部 歴史文化学科 永井 裕子

本資料はヴァチカン図書館が所蔵するルネサンス期の写本の複製である。この写本はボルジア家の教皇のため1492年から95年に制作された。当時の教皇は年に3回、自らミサを司式し、そのうちクリスマスミサで使用するために制作されたのがこのミサ典礼書だ。ミサ典礼書とは、司祭のためミサの進行に関わる指示や朗読テキストなどが記された写本だが、写本所有者の権威が視覚的に伝わるよう、豪華に装飾されることがあった。この写本は特別に豪華で、煌びやかな装飾文字と教皇の肖像画が描かれた第8葉裏、《磔刑図》が画面いっぱいに描かれた第38葉裏などは、独立した絵画作品としての芸術性と魅力を持つ。現在でもこの写本は特別視され、2000年の聖年を目前にしたクリスマスには、実際にミサで利用され、その模様は中継された。

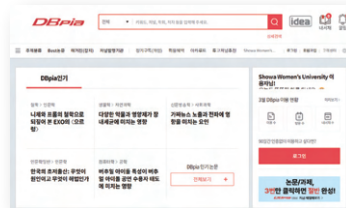


アレクサンデル六世クリスマスミサ典礼書 ファクシミリ版 岩波書店  
Belsler Verlag [reproducer] 1987, c1986 (Borg. lat. 425)  
第38葉裏、39葉表

## 韓国の学術論文データベース DBpia

国際学部 国際学科 徐 珉廷

韓国の学術論文データベース「DBpia」は韓国や海外の大学、国家・公共機関、公共図書館など2,000以上の機関が導入していて、現在（2023年10月基準）の収録論文数は約270万件と論文数では韓国トップである。約1,000の学会・研究所・出版社が発行する刊行物をPDF形式で提供している。本学図書館で2024年4月から「人文社会系パッケージ（1,254誌）」を利用できるようになる。本データベースは研究面と教育面（韓国関連の授業・卒業論文、韓国ダブルディグリープログラムなど）の両方で活用できる。韓国語で発信されるさまざまな文献に直接触れることで、大学での学びをより充実させることと期待する。



DBpiaトップ画面

## 医学専門雑誌・書籍の電子配信サービス 医書.jp

福祉社会・経営研究科 福祉共創マネジメント専攻 高橋 学

専門職大学院の立ち上げに伴い「医書.jp」を導入しました。「医書.jp」は多くの医学系出版社の雑誌・書籍の幅広い電子情報を共通のプラットフォームより配信するデータベースです。保健・医学・医療・福祉の専門情報の電子化によっていつでも・どこでもPCからモバイルまで様々なデバイスで対応可能となります。また文献のダウンロードも可能で、新たな治療や実践、研究に至るまで自身の実践知や研究など必要に応じた知を集積することが可能になります。また、保健、医学、医療系の雑誌書籍が基盤となりますが、その特集は人文学系、社会科学系などの先端的知見が複合的・横断的であります。新たな実践や研究の発見に導く情報ガイドとして役立つ貴重なデータベースです。



医書.jpトップ画面

# 図書館からつながる

図書館では、図書館3階の展示スペースを、学生・教職員・卒業生・中高部生徒のみなさんへ、研究活動の紹介や成果発表を行う場として提供しています。図書館を訪れる人々へ、様々な情報や想いを届けられるよう、ぜひご活用ください。  
2023年度の利用団体2組にインタビューを行いましたので、展示スペースでどんなことができるのか、ご紹介します♪

## CASE 1

2022年度リーダーズ  
アカデミー  
和食・発酵チーム  
「続・女子大生がぬか漬け  
生活やってみた  
～和食継承の第一歩～」

◆展示期間  
2023/10/2～17

◆展示概要  
2022年度リーダーズアカデミーでの報告、日本各地で受け継がれる郷土料理、季節ごとの食材・料理、ぬか漬けの紹介など。  
説明パネルのほか、すごろくや絵本、かわいいキャラクターが登場する動画やクイズなどもあり、楽しく学べる展示。

インタビュー実施日  
2023/12/20  
インタビュー  
和食・発酵チームの  
みなさん

仲良しなメンバーと  
展示風景

Q1. なぜ展示テーマに「和食・発酵」を選んだのですか？

A. 身近にあるはずの和食が実は継承の危機にある事を知り、私たちも何か出来ないかということで「和食・発酵」のテーマを設定しました。

Q2. 展示スペースを利用してみようと思ったのはなぜですか？

A. 2022年度のリーダーズアカデミープロジェクトでやり残したことを形にしたかったのと、展示という形であれば、図書館に足を運ぶ人たちに和食の継承について知ってもらえると考えたからです。自分たちの手にも、目に見える「もの」として形に残しておきたかった、というのがあります。

Q3. やってみて良かった点がありますか？

A. 2022年度のリーダーズアカデミープロジェクトメンバーでもう一度集まって活動ができたこと、メンバーそれぞれの得意分野を把握し活かすことができたこと、取材に協力してくださった漬物屋さんや、アドバイスをくださった先生方など、多くの人と繋がれたこと、形にすることにより得られた達成感など、たくさんあります。

Q4. 大変だった点がありますか？

A. 展示実施時は全員3年生だったこともあり、作業時間を捻出するのが大変でした。就活やインターンシップと重なり活動できない期間もありましたが、メンバーが補ってくれて良かったです。やりたいことが多くて絞るのが大変だったり、夏休みなどは作業スペースを確保するのに苦労したのがあります。



## CASE 2

SWU フェアトレード  
サークル  
「図書館展示  
～フェアトレード  
を知ってみよう～」



◆展示期間  
2023/10/27～11/9

◆展示概要  
昭和女子大学のフェアトレードサークルによる、フェアトレードを知ってもらうための展示。  
世田谷区でフェアトレード商品を扱っているお店のマップや、フェアトレード商品がどんなものか、パッケージなども紹介。  
高校生も参加し、資料にまとめて壁に展示した。

インタビュー実施日  
2023/12/15  
インタビュー  
・サークル代表  
須藤さん  
・サークルメンバー  
古牧さん

フェアトレード商品を  
食べ比べる部員の  
みなさんと展示風景

Q1. SWUフェアトレードサークルとはどんなサークルですか？

A. フェアトレードについて広めていくことを目的としたサークルです。  
活動は週に一度で、「SDGsとフェアトレード」「フェアトレードの歴史」などのテーマでプレゼンを行ったり、フェアトレード商品の情報共有や、世田谷区市民団体のお手伝いなども行ったりします。

Q2. 展示スペースを利用してみようと思ったのはなぜですか？

A. 学生や、図書館を利用する人達にサークルの存在を知ってもらい、フェアトレードについて情報共有する機会としたかったからです。

Q3. やってみて良かった点がありますか？

A. 大規模なイベントを企画すると集客が大変ですが、図書館展示であれば図書館を利用する人達が気軽に立ち寄ることができるし、ちょうど秋桜祭での展示も控えていたので、続けて行うことができよかったです。特に展示ケースを使った展示は見栄えもよく、やれてよかったなと達成感がありました。  
また、一つの目的に向かって作業することでチームワークがより増したのも、大きな収穫でした。

Q4. 大変だった点がありますか？

A. 実際に展示スペースに展示品を飾ってみると、意外と展示ケース内や壁などにスペースがあり、何をどこに置けるか、展示する資料やレイアウトを考えるのが大変でした。



## 図書館展示スペース（コミュニティルーム）貸出案内

募集のお知らせを図書館ホームページ「お知らせ」、UPSHOWA 掲示板、教職員 Web「News & Topics」に掲載しますので、利用希望の方は詳細をご確認ください。

### 2024年度前期貸出日程

① 5月20日(月)～6月5日(水) ② 6月12日(水)～7月3日(水) ③ 7月10日(水)～7月31日(水)

### 2024年度後期貸出日程

① 1月8日(水)～1月29日(水) ② 2月5日(水)～2月26日(水)

※後期貸出日程の募集開始は、夏頃を予定しています。